

男性保育者のジェンダー平等意識に関する一考察

—ノルウェーにおけるインタビュー調査から—

松田 こそえ*

A Study on the Awareness of Male Childcare Workers About Gender Equality

—Focusing on Interview Survey in Norway—

Kozue MATSUDA

Abstract

The gender of childcare workers is biased towards women, but it is believed that having male childcare workers enhances the “quality” of childcare. In Norway, where gender equality is advancing, male childcare workers have supposedly played a role in promoting gender equality since 2000, and policies have been taken to increase the number of male childcare workers. It was aimed at children having a fair awareness of gender equality in early childhood before developing a gender-role stereotype. This study examined the awareness of gender equality among male childcare workers through interviews with five male childcare workers in Norway.

As a result, it was shown that male childcare workers do not think they play a role as a promoter of gender equality and that there are individual differences in awareness of gender roles. It was emphasized that having a diverse range of childcare workers, including male childcare workers, leads to respect for the diversity of children.

Keywords: male childcare workers, Norway, gender equality, gender role, ECEC

1 はじめに

本研究は、ノルウェーの男性保育者へのインタビュー調査を通じて、男性保育者のジェンダー平等に関する意識について明らかとすることを目的とする¹。

保育職は平均賃金の低さ（厚生労働省 2020: 39）や性別職域分離の発生により（中田 2018: 52）、男性が少なく女性に偏る職である。しかし、国内外において近年では保育職に従事する男性保育者が徐々に増えつつあり、OECD を中心に男性保育者に対する注目が高まっている。男性保育者に関する研究も多く、男女の保育者による子どもへの保育態度における性差に関する研究（Polanen・Colonnesi・Tavecchio・Blokhuys & Fukkink 2017）、男性保育者を取り巻く各国の状況と課題に関する研究（Cameron 2001, Perkins・Tracey & Sullivan 2018, Xu & Waniganayake 2017）など多様な視点からの研究の蓄積がある²。これら多くの国内外の

キーワード：男性保育者、ノルウェー、男女平等、性別役割、保育施設

* 武蔵野大学 教育学部 講師

研究による知見として、男性保育者の存在は保育の「質」を高め、子どもの発達や学びを促す役割を果たすとして重視され、女性の同僚からも好意的に受けとめられていることが明らかとされている（OECD 2019: 27）。

さらに、男性保育者の存在を社会の男女平等を実現するプロモーターとしてみる視点からの研究にも着目することができる（Barne-og likestillingsdepartementet 2008: 45）。OECDによると、保育施設に男性保育者がいることにより、子どもたちは、特に性別役割についての公平性に関する望ましい姿勢を身につける可能性が高まると考えられている。実際、オランダ、フランス、ノルウェーでは7.5%から12.5%の保育者が男性であり³、社会における男女平等が進む北欧を中心とする国々でも、男性保育者が男女平等を牽引する役割を担う存在と考えられ、男性保育者の数が積極的に増やされてきた（OECD 2019: 27）。男性保育者と女性保育者のジェンダーバランスの不均衡を均すために、男性保育者の割合を増やす取り組みについては、EECERA（ヨーロッパ幼児教育学会）のジェンダーバランス部会をはじめとして、複数の国の研究者による国際的な共同研究も進められている⁴。すなわち、性別に関するステレオタイプを持つ前の年齢の子どもたちが、男性保育者に接することにより、男女平等に関する公平な意識や態度を身につけることができると考えられ、国の政策上、積極的に男性保育者の数を増加させるための具体的な行動がとられた国があることが明らかとなっている（OECD 2019: 29）。

特にノルウェーは、2001年に子ども家族省より発行された『保育施設に2001-2003の期間により多くの男性を採用するための行動計画（*Handlingsplan for å få flere menn i barnehagen i perioden 2001-2003*）』等々に示されるように、国や地方自治体の予算が投入され、男性保育者の数を増やすために、積極的な政策がとられた国である。ノルウェーでは、男女平等社会の実現に関して幼児期の教育が果たす役割に注目が集められた。具体的には、保育施設における男性保育者と女性保育者との人数のジェンダーバランスを整えるため、国や自治体が主導して男性保育者数の増加が目指された。つまり、男性保育者には男女平等を促進するプロモーターとしての役割を担うことが期待されたことが確認されている（山中 2019、松田 2020a、松田 2020b）。

一方で、男性保育者の役割意識に関する研究にも着目することができる。男性保育者としての役割意識に関する先行研究として、エミルセンはノルウェーにおける男性保育者を取り巻く状況と意識について分析し（Emilsen 2015）、中田は男性保育者としての意識には経験や時期により変容があり、経験が浅いうちは男性としての性別役割を担おうとするが、経験が長くなることで男女の性別よりも保育者としての専門性を強く意識するようになると考察している（中田 2004: 50）。また佐々木は、男性保育者は「男性」ならではの困難を乗り越えるため、複数のストラテジー（戦略）を併用していると指摘している（佐々木 2015: 46）。さらに青野は「ジェンダー・フリー保育」の観点から（青野 2009: 27）、中島・永田は役割意識についての男女の差異の観点から（中島・永田 2016: 132-133）、また井上・石川はアイデンティティの確立や課題の観点から（井上・石川 2008: 213）、それぞれ男性保育者の意識について議論している。

つまり、一方では政策において、男性保育者が男女平等のプロモーターとしての役割を期待されるようになってきた経緯は明らかにされてきており、他方では男性保育者の意識に関する研究による知見が蓄積されてきている。しかし、政策と男性の意識関係について、すなわち、政策的に男女平等を推進するプロモーターとしての役割を担うことに対し、男性保育者自身がどのように考えているのかに関する研究は十分とはいえない。保育施設においていかに政策上、男性保育者の数が増やされ、子どもの男女平等意識を醸成する保育が目指されたとしても、実際に子どもと接するのは、政策ではなく保育者である。幼児期における男女平等に関しての保育者の考えや意識、保育者が子どもにかけ言葉、保育者自身のジェンダー観、子ども観、保育環境の設定、保育内容等が子どもの男女平等への意識と関連性を持つと考えられる。したがって、保育における男性保育者による男女平等について検討するにあたり、実際に子どもたちと接するノルウェーの男性保育者の意識について検討することが必要と考えられる。そこで、ノルウェーにおける男性保育者の持つ役割意識に着目した。

本研究では、ノルウェーの男性保育者へのインタビュー調査によって得られた語りの内容の分析を通し、ノルウェーの男性保育者は男女平等のプロモーターとしての役割をどのように意識しているのかについて、明らかにしたいと考える。

2 研究の方法

本研究では男性保育者自身の意識を検討するという課題を明らかにするにあたり、対面での半構造化インタビューおよびメールでのインタビューを実施した。

調査対象者の概要は表1に示した通りである。本調査の対象者はいずれもノルウェーのトロンハイム（Trondheim）またはメルフェス（Melhus）、オスロ（Oslo）で保育に関わる職に就いている現役の男性保育者と、過去に保育職に就いていた元男性保育者である。筆者が現地で直接対面でのインタビューをしたものが4名、また直接面識はないが電子メールでのインタビューをしたものが1名である。調査対象者は、筆者の所属するO大学と共同研究を行っているノルウェーのN大学ジェンダー研究所を通じて紹介された。まずノルウェーのN大学のジェンダー研究所のスタッフの個人的な知り合いである保育施設の施設長を紹介されたのち、事前にメールにて保育施設の見学およびインタビューを依頼した⁵。最初の協力者に依頼したあとは、スノーボールサンプリングによって他の保育者や他の園に協力を依頼した。また1件は日本に帰国してから保育施設長を通じてメールで電子メールでのインタビューへの協力を依頼したものが含まれる。インタビューデータを得た時期は、筆者がノルウェーのトロンハイム、メルフェス、オスロを訪問した2019年9月17-23日の期間、および電子メールでのインタビューの協力を得られた2020年1月である。

表1 インタビュー協力者の属性およびインタビュー時間

協力者	属性(保育者資格の有無)	勤務施設	地域	性別 年代	インタビュー形式と 時間(分:秒)
A	現施設長(保育資格あり)	公立保育施設	Melhus	男性 40 歳代	対面 60:13
B	現保育者(保育資格あり)	私立保育施設	Trondheim	男性 30 歳代	対面 32:25
C	元保育者(保育資格なし)	私立保育施設	Trondheim	男性 20 歳代	対面 22:48
D	元保育者(保育資格あり)	私立保育施設	Oslo	男性 30 歳代	対面 30:29
E	現保育者(保育資格あり)	私立保育施設	Trondheim	男性 20 歳代	電子メール

(筆者作成)

インタビューは保育施設の応接室や施設長室、個人宅、および電子メールにて行った。インタビュー協力者と対面にてノルウェー語ではなく英語で実施し、①インタビューの趣旨および、②インタビュー結果の使用目的と使用方法、③個人名は伏せられプライバシーに配慮して結果を用いること、④インタビューの際には答えたくない内容には答える必要がないこと、⑤インタビューの途中でいつでも取りやめることができること、⑥本人が希望すれば結果を後日送付すること、⑦記録のためにICレコーダーで録音することの7項目について説明し、本人が了承のサインを書いたのち、ICレコーダーで録音した。

インタビューは、3つのカテゴリー、すなわち1つ目「男性保育者としての役割についての考え」、2つ目「幼児期から男女平等意識を培うためのノルウェー政府の政策についての考え」、3つ目「幼児期に保育施設で男女平等意識を培うことの意味の有無と、幼児や保護者に対する具体的な実践の有無と内容」に関する8問の質問について半構造化インタビュー方式で実施した。質問の項目は、主に2つの先行研究をもとに設定した。まず、男性欧州連合保育ネットワークの討議資料にみられる議論書にて述べられた3つの観点「保育の仕事に携わる男性の数を増やすことがなぜ重要なのか」「これを達成するためにはどのような状況が必要か」「どうすればこういった状況を作れるのか」(Jensen, 1996=2006: 39)に関してど

のように考えているのかについて質問した。また、青野が「ジェンダー・フリー保育」の観点から設定した16の質問項目を参考にした（青野 2009: 4）。調査協力者の自由な語りを促すことに重点を置き、インタビュー時の状況や対象者の回答の状況に合わせて、質問項目や説明を加えた。

インタビューの結果、得られたテキストは、後日逐語テキストに変換した上で、筆者が日本語翻訳し、文章・内容の固まりごとに分け、本研究のリサーチクエスチョンに即して語られた内容を分析した。分析にあたっては調査協力者と調査者（筆者）の対話の一部を引用する。調査協力者は表1の表記に従いA-Eのアルファベットで表した。

5名に対して実施したインタビューデータは、「男性保育者としての役割についての考え」、「幼児期から男女平等意識を培うためのノルウェー政府の政策についての考え」、「幼児期に保育施設で男女平等意識を培うことの意味の有無と、幼児や保護者に対する具体的な実践の有無と内容」の3つの視点に関する内容について抽出し、語られたことを分析した。

なお、インタビューの際は、対面でのインタビューについては保育施設、および本人に承諾を得た上で、日本学術振興会のガイドラインや日本保育学会倫理綱領を参考に倫理的配慮をした。インタビューの前に、本人による承諾書への署名により、同意を確認した。メールでのインタビューにおける倫理的配慮については、お茶の水女子大学人文社会科学研究所の倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号2020-1）。

3 男性保育者としての役割についての考え

ここでは、まずインタビューを通して語られた男性保育者の持つ保育者として求められる役割について、語られた内容をもとに検討する。男性保育者の持つ保育者として求められる役割に対し、具体的な内容については5名のうち4名が語っていた。そのうち、そのような役割について肯定的な語りが2名（B、C）、否定的な語りが2名（D、E）で見られた。ここでは質問への回答を中心に関連する語りも含めて検討する。

男性で若いから、いつも外で駆け回ることを期待されたけれど嫌ではありませんでした。（C：元保育者）（下線は筆者による。以下同様）

C氏は、戸外で走り回ることが好きか嫌いかという個人の志向は一切考慮されずに、「男性」で「若い」からという理由で、女性保育者から「いつも」外で駆け回ることを期待されたと述べる。しかしこれに対し、「嫌ではありませんでした」と語るように、否定的な感情を持ってはいない。明るいい口調からは、むしろ、男性保育者として若く元気いっぱい子どもたちと走り回るといふ、ステレオタイプの役割を自分から好んで引き受けた印象を受けた。後述するように、C氏は、近所に住むC氏の母親の知人に誘われて半年間アルバイトとして勤務したと述べている。保育についての専門知識はなく、子どもと元気に走り回ることを期待されてアルバイトとして採用されたと本人が考えていたと考えられ、C氏にとって、外で元気に子どもたちと一緒に走り回る役割は引き受けやすいものであったと考えることができる。

男性だからという理由で重たいものを運んだり、大工仕事を頼まれたりすることは多いけれど別に嫌ではないし、そういうことで役に立てるなら、喜んで役に立ちたいと思っています。（B：保育者）

B氏もまた、女性保育者から「男性」だから当然、重たいものを運ぶのも、大工仕事も「得意」であり、喜んで引き受けてくれるはずと思われていることに対し「嫌ではない」と語る。女性が多い職場において、「男性」としての役割を求められることに対し、自分の存在意義を見出しているともいえよう。B氏は自分に姉妹がいて、家族の中に女性が多かったことから、女性の多い職場で働くことに抵抗がなかったと語った。男性保育者としての役割を押しつけられるというよりは、むしろ、自らの得意分野として進んで引

き受けている印象を受けた。B氏は悪天候の中でも、外で子どもと遊び続けることを期待されることについても、次のように語った。

男性だから、いつも保育中に外にいることを求められます。自分は、もともと外で活動することが好きだから苦にならないが、男性の中でも外にいることが苦手な場合もあるだろうから、そういう人にとっては苦に感じるでしょう。(B: 保育者)

B氏は、インタビューをした翌週に予定されている野外キャンプウィークのことを楽しみにしていると語り、野外で子どもたちと活動することに対し積極的な様子が見られた。このような語りからは、男性保育者としてというよりもB氏の性格や好みを表していると考えられた。

一方、E氏に「他の保育スタッフは、あなたが保育の場で、重い荷物を運ぶ、悪天候の屋外で遊ぶなどの伝統的な男性の役割を演じることを期待していると思いますか」と質問したところ、以下のような回答が得られた。

はい！間違いなく！すべての人がいつでもそうというわけではありませんが、間違いなく一般的です。男性保育者は戦い遊びが好きで、屋外にいることと、女性ほどおむつ交換をしないことなどが一般的です。私は(保育施設での) 教育実習中に複数の園に行き、このような経験をしましたが、いまだにそのような状況が残っているのは悲しいことであり、驚くべきことだと思います。(E: 保育者)

このようにE氏は、女性保育者が男性保育者に対しステレオタイプを持ち、男性保育者に対し伝統的な性別役割を期待することに対し、抵抗を感じている。また、自らが伝統的な性別役割に基づいた仕事を担うことにも抵抗を感じていると考えられる。複数の園で、同じような経験をし、このことに対し「悲しく」「驚くべきこと」と表現する。就職した保育施設で根強く伝統的な性別役割への期待が残っていたことに非常に驚いたという点に着目することができる。

E氏によると「男性保育者は戦い遊びが好き」といういわゆるステレオタイプに基づいた行動が一般的であると述べられているが、これは、男性保育者が戦い遊びを好むというより、子どもたちが、女性保育者とではなく男性保育者と戦い遊びをすることを楽しいと思い、好んで男性保育者を戦い遊びに誘うという状況があると考えられる。男性保育者だからというステレオタイプに基づいた保育を期待されることに対してE氏は抵抗を覚えているが、実際には、男性保育者がいることで子どもたちの遊びの幅が広がり、ダイナミックな遊びが展開されるなどの面にも目を向ける必要がある。

また、保育者として勤務するようになったきっかけや経緯を尋ねたところ、D氏により以下の内容が語られた。

昔から子どもと遊ぶのが大好きで、保育者に向いていると思って採用面接を受けに行きました。面接の後、すぐに採用されましたが、自分の保育者としての経験や専門性よりも、男性だからという理由で採用されたと感じて、それは違うと思いました。(D: 元保育者)

D氏は、インタビューの時点では都市にある子ども図書館⁶⁾に勤務しており、以前は保育施設の保育者として働いていたと語る。筆者が保育者になった経緯を尋ねたときに、「保育者」としての適性による採用ではなく「男性保育者」であるからという理由での採用であったと感じたことへの不満や葛藤を思い出し、「それは違うと思いました」と眉をひそめた。つまり、D氏は本人の人間性や、学位を取った保育者としての専門性を認められて採用されたいと希望していたのにもかかわらず、自らの採用面接の際の面接官の言動から、「男性」であるからという理由だけですぐに採用が内定したことが、男性優遇という逆の意味

での差別を受けたと感じているのである。確かに、保育職はノルウェーにおいても9割は女性である。性別にかかわらずに自分の適性に合った職を選ぶことが目指されているのであれば、「男性保育者」としての採用ではなく、「保育者」としての適性で採用されたいと考える男性がいることの意味を考える必要がある。男性保育者の数がさらに少ない2009年までは、まずは男性保育者の数を増やすことが優先され、男性保育者を増やす国や自治体を挙げてのキャンペーンや採用における優遇政策が取られた。D氏の語りからは、そのような男性優遇政策の影響ではなく、性別にかかわらず保育者の適性をみて採用されたい男性の出現をみることができる。つまり、時代の変遷と共に、性別役割分業意識を持たない男性もいると考えてよいであろう。

子どもたちに公平な男女平等意識を醸成するためには、女性保育者が多い職場に、男性保育者が増えるだけでなく、男性のみならず女性の意識も変化していく必要がある。2006年に発行された『保育施設の男性に関するテーマブックレット、保育施設での男性の採用と維持について』(Temahefte om menn i barnehagen, om å rekruttere og beholde menn i barnehagen)では、保育中に戸外で遊ぶのは男性保育者、室内で遊ぶのは女性保育者、または重たいものを運ぶのは男性保育者、軽いものを運ぶのが女性保育者など、保育施設の中で男女の役割分担をすることを子どもが日常的に目にすることで、偏った性別役割分業意識を教えることにつながる可能性について指摘されている(Kunnskapsdepartementet, 2006: 6)。すなわち、子どもたちの男女平等への公平な意識を保育施設において育むためには、保育施設に男性保育者と女性保育者との両方が数の上でバランスよく勤務していることも重要だが、そのなかでも保育者が性別役割にとらわれずに仕事を分業する姿を子どもたちに日常的に見せることが重要であると述べられている。たとえば保育施設に重たい荷物があったときに、男女共に手が空いている保育者が運ぶなど、性別役割によってではなく、状況によって仕事の分業が決定されるということなどである。しかし、このように政府発行の文書での指摘がありながらも、実際の保育の場では、このことに関する保育者の意識は高いとはいえず、「女性だから」「男性だから」のステレオタイプが残り、それを避けようとする意識はまだ不十分であると考えられるだろう。男女平等が進んでいると考えられているノルウェーにおいても、性別役割に関するステレオタイプはいまだ根深く残っていることが示唆された。

また、B氏、C氏、D氏、E氏の語りの違いからは、男性保育者だからという理由での役割を求められることに対して、特に否定的な感情なく受け入れている保育者も、批判的に捉えている保育者もいるということが示された。

4 幼児の男女平等意識を養うために男性保育者を増やす政策について

幼児の男女平等意識を養うために男性保育者を増やす政策に関する質問に対し、具体的な内容については5名のうち2名(D、E)が語っていた。そのうち、保育職に就くことに関し男性保育者を増やす政策の影響については語らなかったものが3名(A、B、C)であった。以下では、政策に関わる回答および保育者になった経緯に関する経緯をもとに分析する。E氏からは以下の内容が語られた。

意向は良いと思いますが、男性だからという理由だけで男性の保育士がいるというのは好きではありません。日常生活から政治家まで、保育職についてどのように話すかが大事だと思います。そうすれば、(保育職が)男性女性問わず、誰にとっても魅力的なものになるはずです。その結果として、男性の応募者が増えるでしょう。(E: 保育者)

このように、E氏は、男性保育者を増やす政府主導の取り組みについて一定の効果を認めつつも、「男性」だけに着目した政策ではなく、保育職が男性にとっても女性にとっても魅力的な職になることが重要

であると指摘する。男性の保育者がいることが望ましいという理由だけで男性保育者を積極的に採用するというのではなく、保育職の魅力に対する社会的な認知度を上げることにより、男性の保育者が増えればよいと考えている。これは、男女平等の旗振り役として男性保育者を位置づけるのではなく、保育職自体の価値を高める取り組みが必要という考えを示唆している。

また、男性保育者を増やす政策の影響に関しては語らなかつた男性保育者たちは、保育者になった経緯について以下のように語っている。

高校を出てバーで3年間働き、その後郵便局に務めました。その後大学でメディア学と社会学を学びましたが、自分の人生プランを描けませんでした。その後、子どもと一緒に過ごすのが好きだったので、アシスタントティーチャーとして働きながら、保育の資格を取るために学校にも通い、4年かけて保育の学位をとりました。（B：保育者）

このB氏の語りから、最初から保育者としての仕事を目指していたわけでも、職業の選択肢の一つとして考えていたわけではないことがわかる。一度就職した後に進学した大学で学んだメディア学や社会学の専攻を活かすのではなく、アルバイトとしてたまたま保育施設に勤めることにし、その後、保育士資格を取得するために学校に入り直している。ここには、男女平等を推進する役割を担うといったことに通じる内容は語られなかった。

C氏に関しても、以下の内容が語られた。

高校を卒業した後、海外に行きたくて、旅行費用をためるために半年間、保育施設で働きました。きっかけは近所の方が保育施設に務めていて、「今、他に仕事をしていないなら、いらっしやいよと」たまたま誘われたことでした。保育のアシスタントとしてアルバイト代を貯めて、そのあと大学に入り、しばらく通った後に1年間大学を休学して、ニュージーランドやベトナムなど、いろいろな国を回る10か月間のプログラムに参加して、そこで今の彼女に出会いました。（C：元保育者）

C氏からは、保育者になることを目指して専門の勉強をしていたわけでもなく、知人に誘われたことにより「たまたま」一時的に保育のアシスタント保育者をしたと語られる。

保育施設の施設長をしているA氏からは、以下の回答が得られた。

もともと写真が好きで、写真を撮る仕事をしていました。写真家として車や靴やいろいろなものの販売促進用の写真を撮っていました。ある時、子どもの写真を撮る仕事を頼まれて、何日間か保育施設に通って、森の中での子どもたちのキャンプの写真を撮りました。その経験がとても楽しかったので、保育施設に勤めることにして、働きながら資格を取りました。

前の施設長がやめたので、今年度から施設長になったばかりです。（A：施設長）

このように、施設長を務めているA氏も偶然に保育の場に関わることになり、その後「前の施設長がやめたので」施設長になったと語る。すなわち、計画性を持って保育職を選んでいるわけではないことは、B氏、C氏と共通のこととして注目することができる。

政府は保育施設に男性保育者がいることが子どもにとっての男女平等の意識を育むために重要であると考え、男性保育者を積極的に採用する政策を進めた。しかし、男性保育者自身は、子どもの男女平等の意識に役立つ役割を担うという意識をもって、保育職に就くことを決めたとは語られなかった。むしろ、それぞれの男性保育者が、保育職に就くまでに多様なキャリアを辿っていることが明らかとなった。

5 幼児や保護者に対する具体的な実践の有無と内容

幼児期に保育施設で男女平等の意識を育むことの意味と、男女平等の意識の醸成につながる実践の有無についての質問に対し、意味があると答えたのは4名（A、B、D、E）であった。また、具体的な実践があると答えたのは3名（A、B、E）であり、そのうち幼児に関しての実践は3名（A、B、E）、保護者への実践は2名（A、B）が語っていた。ここでは、各保育者の考え方の特徴が特に表れている語りを引用して検討する。

特に男の子か、女の子かどうかを意識することはありません。男の子か女の子かというよりも、子ども一人ひとりの気持ちや考えを大切にしたいと思っています。たとえば、男の子も女の子も悲しくて泣くことがあります、「泣かないで」や「泣きやんで」とは言いません。「どうして泣いているのか、僕にできることがあれば教えて。」と言って、その子の気持ちを大切にしたいと思っています。（B：保育者）

B氏は、男の子か女の子かといった性別ではなく、一人ひとりの気持ちを尊重したいと語った。他の語りの内容からも、男の子だから、女の子だからという性別による違いに関する発言は見られなかった。一方でE氏は、幼児期から男女平等意識を育むことについて質問したところ以下のように回答している。

絶対！ 幼児期は価値観の基礎が学ばれているところです。私たちには、彼らやその家族が誰であるかに関係なく、尊敬、寛容、自己意識などの基本的な価値観を教える義務があります。（E：保育者）

E氏の回答からは、保育に携わる保育者が、幼児期は価値観の基礎を学ぶ時期であり、保育施設はそれを実践するところであるということを確認し、子どもたちに積極的に伝えようとしていることが示されている。また、E氏は施設において、公平性に関する価値観を学ぶことが重要という幼児教育カリキュラムや政策を理解し、自ら実践していると回答した。

次にA氏からは、男女平等の観点から、特に父親に関し以下のことが語られた。「保護者の男女平等への意識のために、何か気をつけていることはありますか？」という質問に対してA氏は以下のように回答した。

子どもが保育中に発熱して急な迎えが必要な時に、指定がなければ、まず母親ではなく父親に電話するようにしています。母親が迎えにくる場合も多いですが、その時にも父親から母親に電話してもらうのです。（A：施設長）

このようにA氏は、自分が父親の育児参加を促すための方法を語る。この発言を補足するように、A氏は「確かに、一般的には保育中に子どもが発熱したとき、まず保育者は母親に連絡を入れることが多いけれど。」と語った。子どもの発熱の時に連絡をする時に、保育者が、まず母親に電話をすることが多いのは、母親のほうが、主となり子育てをし、子どもと一緒にいる時間が長いことが多いと考えられているからであろう。しかし、父親も母親も就業率が高く、仕事を持つのが一般的（SSB 2020）であるノルウェーの場合、必ずしも母親が迎えに来るのが一般的とはいえない⁷。父親の職場のほうが園に近い場合や、仕事の種類から時間の融通が利くのが父親の場合もあるだろう。A氏の園に関しては、4時から4時半の保育後に子どもの迎えに来る保護者は、むしろ父親のほうが多いと語られた。

さらには、「園に男性保育者がいることの意味にはどのようなことがあると思いますか？」と尋ねたところ、B氏からは次のような回答が得られた。

自分（男性保育者）が子どもと遊ぶときの様子を見て、父親が（自分の）子どもと遊ぶ方法を取り入れたりすることもあると思います。（B：保育者）

ここではB氏は子どもたちにとって男性保育者がいることの意味ではなく、保護者、中でも父親にとって、園に男性保育者がいることの意味を語っていることに着目したい。女性保育者だけではなく、男性保育者が園に勤務し、子どもたちの世話をしたり、遊んだりする姿を見て、子どもたちとの具体的な接し方を父親たちが学び、その方法を取り入れたり参考にすることを意識しているというのである。つまり、男性保育者が父親のモデルになることを想定している。

また、男女平等に関して、「子どもの男女平等への意識を高めるために、保育士として何かしていることはありますか？ある場合は、具体例を挙げてください。」という質問には、以下のような回答が見られた。

クラスの子どものうちの誰かが「それは男の子/女の子のためのおもちゃや衣類、髪、遊びだよ」と決めつけた時には、私たちは彼らがなぜそう思うのかについて尋ね、さらにその件について子どもたちと話し合い、考えます。話し合いの最後には、彼らは、人はどんな性別であるか、そして彼らが何を着たり、遊んだりしたいのか、それぞれであり、性別による違いではないと説明します。他の人に悪影響を与えない限り、誰もが好きなことをできるはずです。

それから、子どもたちに自分の考え方を知ってもらうようにします。女の子の色や男の子のおもちゃなどはありません。男女の差を意識した内容に沿って言ったり考えたりするのではなく、むしろ彼/彼女らが何に興味を持っているかに気がつき、励まし、そして興味を持ってくれることを提示することが、効果的でしょう。」(E：保育者)

上記のE氏の回答からは、子どもたちの性別による役割意識につながる発言は見逃すことなく、その発言に至る理由を子どもに尋ね、そのうえで話し合い、最終的には人は性別によって何かを決められるべきではなく、好きなことを選ぶことにつながるという保育における実践を確認することができる。子どもが公平ではないものの見方や判断、発言をしたときに、その発言を幼い子どもということだからと聞き流すことなく、また叱ることなく、子どもと共に対話し考える保育者の姿勢が、子どもの公平性への意識を醸成することにつながると考えられている。E氏の回答によると、「性別による違いではない」と述べられている。保育者が、男女の性別ではなく一人ひとりの興味関心に寄り添うことを重視していることが示唆される。つまりE氏は、保育施設における生活や保育者の言動によって、「男の子だから」「女の子だから」といった男女別の性別役割分業の意識を子どもが持たないように注力していることがわかる。

一方で、他の研究では保育者が無意識のうちに男児女児へと異なった対応や振る舞いをしていることを指摘するものがある。ここでは、保育施設の先生は男の子と女の子とどのように接するかについて、より深く配慮する必要があると述べられている⁸。

上記のように、幼児期に保育施設で男女平等の意識を育むことの意味と、男女平等の意識の醸成につながる実践の有無については、重点的に語られる内容が保育者によって異なっていたことを指摘することができる。具体的には、男女の性別ではなく一人ひとりを尊重することに注力している、幼児期について男女平等を含め子どもの公平な価値観を築く大事な時期であると考えている、子どもにとってだけではなく保護者の男女平等への意識を養うことを目指しているという点をそれぞれ重視する保育者の存在が明らかになった。

6 おわりに

以上のように、本研究のテーマである男性保育者の幼児の男女平等に関する意識に関し、保育者にインタビューをした結果を分析した。その結果、以下の3つのことが明らかとなった。

一点目として、ノルウェーの男性保育者の性役割についての考え方に關しては、多様で個人差があり、男性としての性役割を自ら積極的に担いたいと考える保育者もいれば、保育者としてより「男性」保育者としてみられることに抵抗感や不快感を覚える保育者もいた。一方で、保育施設に勤める女性保育者による、男性保育者への男性としての性役割に対する期待は根強く残っているということは共通に語られ、新たな性別に関するステレオタイプを生み出す状況がまだまだ残されているということが明らかとなった。すなわち、保育施設において男女平等の意識を子どもたちに伝えるためには、男性保育者が数多く採用されればよいということではなく、保育施設の中の保育者間で性別役割による仕事の分担に偏っていないかについて、男性保育者も女性保育者も折に触れて考えていく必要があるといえるだろう。

二点目として、政府は子どもの男女平等意識を培う役割を担う存在として男性保育者を増やす取り組みを積極的に実施したが、男性保育者自身はその役割を担うことを意図して保育職に就いたとは考えていなかったことが明らかとなった。それよりも今回のインタビュー調査では、男性保育者が保育職に就くまでの多様なキャリアに注目することができた。

三点目として、幼児期の子どもが男女平等への意識を持つことにつながる具体的な取り組みにおいては、男女平等について折に触れて積極的に教えるというより、子ども一人ひとりを尊重するということが大切にされていたことが明らかとなった。またその方法や考え方は、保育者それぞれによって異なっていることが示された。ノルウェーでは、男性保育者が男女平等のプロモーターとなり、子どもたちの男女平等意識を培うための重要な役割を担うと考えられ、その数を増加させる政策がとられた。しかし実際には、男性保育者がプロモーターとしての自分の役割を強く意識し、子どもたちや保護者に実践を通して働きかけるかどうかは、個人の考えによるものであった。すなわち、法律や政策で保育施設における男女平等を推進することと、保育者の意識とは一致するものではないということである。

男性、女性に関わらず、多様な考え方や意識を持つ多様な保育者がいることが、子どもたちの平等意識を育む上で重要と考えられるのではないだろうか。もともとは、保育施設において子どもたちの男女平等の意識を育むことが目指されてきたが、現在では男女平等よりも多様性の尊重が目指されていることに広がりを見せていることが示唆された。男性女性といった属性にとらわれることなく、子どもたちと接する保育者が多様であることによって多様な価値観が併存していることが子どもにとって重要であり、政策により数が増えることが意図された男性保育者の存在は、女性優位の職場に多様性を持ち込む存在となったと考えられるだろう。

今回は、5人のノルウェーの男性保育者に対するインタビューを通して、男性保育者の保育における男女平等に関する意識について検討した。子どもたちが男女平等に向けた意識を持つためには、子どもたち自身が男女の性別にかかわらずに平等に接せられることと、子どもたちの身近にいる大人たちが男女平等を達成していることを子どもたちが目にすることの2つの方法が考えられる。この後者に関する視点において、女性が多い職場に男性が参入することによる子どもたちへの影響は大きいと考えられるが、今回は限られた人数への調査であったため、結果として導かれたことには個別性が強く反映された。男性保育者の存在により、どのように子どもたちが男女平等の意識を持つことにつながるのか、また、男女平等に向けた政策との関連で男性保育者の入職年度によって男女平等意識に差異があるのかについても、今後さらに検討する必要がある。

【註】

- ¹ ノルウェーの保育者には、幼児教育の学位をとった有資格者とアシスタントティーチャーとして従事する無資格者がいる。本研究では両方を区別せずに保育者と記す。
- ² 日本では、厚生労働省の『平成30年賃金構造基本統計調査』によれば、女性保育士数が21万6220人に対し、男性保育士数は1万3400人と、全体の約5.8%である。また男性保育士数は5年前の9470人と比較すると、増えているといえる。なお、同調査によると女性の幼稚園教諭数が7万2490人に対し、男性の幼稚園教諭数は3490人である。（政府統計 <https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003084610> 2020/5/5 閲覧）男性保育者への注目の高まりに伴って、日本における男性保育者に関する研究も増加しており、高嶋・安村が男性保育者に関する研究の動向を整理している（高嶋・安村，2006）。
- ³ 東ヨーロッパやイスラエル、ポルトガルでは男性保育者の占める割合は女性保育者の1%にも満たない（OECD 2019: 28）など、依然として女性中心の職である国が多い。
- ⁴ ヨーロッパ幼児教育学会（EECERA-European Early Childhood Education Research Association）の研究グループのひとつとして、ジェンダー・バランス部会が設置されている。<http://www.eecera.org/sigs/>（2022/3/15 閲覧）
- ⁵ 1975年の最初の保育施設法（*Barnehageloven*）により、ノルウェー語で保育所を意味するダーグヘム（*Darghem*）と幼稚園を意味するバルネハーグ（*Barnehage*）が統一され、両方の機能を併せ持つバルネハーグ（以下、保育施設とする）と名づけられた。ノルウェーの保育施設について、日本語では研究者や文献によって、「保育園」「保育所」「保育施設」「幼稚園」「子ども園」「こども園」「デイケアセンター」等、訳語が統一されていない。本研究では、1975年以降のノルウェーのバルネハーグをすべて保育施設と称することとする。
- ⁶ オスロにある子ども図書館（*Deichman Biblo Tøyen* <https://deichman.no/bibliotekene/biblo-t%C3%B8yen2021/10/20> 閲覧）である。15歳以下の子どもが入館可能で、子ども図書館の機能に加えて児童館のように遊べる場となっている。
- ⁷ 女性の就業率(20-66歳)は75.4%、男性の就業率(20-66歳)80.1%である(SSB 2021)。
- ⁸ このことに関し2017年10月20日のノルウェーの新聞記事では、保育施設の保育者からの女の子と男の子への対応の仕方が異なることを明らかにした研究について紹介している。Hilde Moi Østbø, *Stavanger Aftenblad*, October 20, 2017. <https://www.aftenbladet.no/lokalt/i/Ed4E2/barnehageansatte-behandler-jenter-og-gutter-forskjellig>（2022/3/15 閲覧）。

【参考文献】

- 青野篤子，2009，「男性保育者の保育職に対する意識—ジェンダー・フリー保育の観点から」『福山大学人間文化学部紀要』3: 9.
- Barne-og familiedepartementet, 2001, *Handlingsplan for å få flere menn i barnehagen i perioden 2001-2003*. BF.
- Barne-og Likestillingsdepartementet, 2008, *No.8 to the Storting-Om Menn, mannstroller og likestilling*. BL.
- Cameron, C., 2001, “Promise or Problem? A Review of the Literature on Men Working in early Childhood Services”, *Gender, Work and organization*, 8(4): 430-451.
- Emilsen, K.ed., 2015, *Likestilling og likeverd i barnehagen*, Bergen: Fagbokforlaget.
- 井上清子・石川洋子，2008，「男性保育者に求められる役割と問題」『生活科学研究』30: 207-214.
- Jytte Juul Jensen, 1996, *European Commission Network on Childcare and other measures to reconcile employment and family responsibilities me as workers in childcare: A discussion paper*（小崎恭弘訳，2006「保育における労働者としての男性欧州連合保育ネットワーク討議資料より」）神戸常盤短期大学紀要. 28: 37-44.
- 国立教育政策研究所，2020，『幼児教育・保育の国際比較：OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 報告書——質の高い幼児教育・保育に向けて』国立教育政策研究所。
- 厚生労働省，2020，「保育の現場・職業の魅力向上検討会第6回参考資料1・保育士の現状と主な取組」<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000672997.pdf>.（2022/3/15 閲覧）
- Kunnskapsdepartementet, 2006, *Temahefte om menn i barnehagen, om å rekruttere og beholde menn i barnehagen*. Akademika.

Kunnskapsdepartementet, 2012, *Forskrift om rammeplan for barnehagelærerutdanning*,

https://www.regjeringen.no/globalassets/upload/kd/rundskriv/2012/forskrift_rammeplan_barnehagelaererutdanning.pdf.

Kunnskapsdepartementet, 2013, *Kompetanse for framtidens barnehage: Strategi for kompetanse og rekruttering 2014-2020*. KD.

Kunnskapsdepartementet, 2017, *Kompetanse for fremtidens barnehage Revidert strategi for kompetanse og rekruttering 2018-2022*. KD.

松田こずえ, 2020a, 「保育者のジェンダーバランスに関する研究—1997年から2017年までのノルウェーの保育政策の分析から—」『保育学研究』58: 179-189.

松田こずえ, 2020b, 「ノルウェーの保育カリキュラムの改革動向—男女平等に向けた取り組みに着目して—」『国際幼児教育研究』27: 123-139.

中島卓裕・永田雅子, 2016, 「男性保育者がもつ役割意識—保育経験による差異と女性保育者の認識との差異に着目して」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要・心理発達科学』63: 129-134.

中田奈月, 2004, 「男性保育者による『保育者』定義のシークエンス」『家族社会学研究』16(1): 41-51.

中田奈月, 2018, 「女性に偏る職業で男性は何をしているか—男性保育者の事例から(特集 男性労働)」『日本労働研究雑誌』60(10): 52-62.

小田進一・梅原健吾・佐藤瞭・齊藤巧馬, 2020, 「保育現場における男性職員が抱える課題—ジェンダー視点からの検討」『北海道文教大学論集』21: 127-131.

OECD, 2019, *Good Practice for Good Jobs in Early Childhood Education and Care*, OECD Library.

Perkins, H., E.Tracey, J. Sullivan, 2018, *Men in Childcare-Does it matter to children, what do they say? (Stage2)*, University of Wolverhampton.

Polanen, M., C. Colonnese, L. Tavecchio, S. Blokhuis, R. Fukink, 2017, “Men and Women in Childcare: A Study of Caregiver-Child Interactions”, *European Early Childhood Education Research Journal*, 25(3): 412-424.

佐々木奈々子, 2015, 「男性保育士はいかにして『男性』保育士となるのか—戦略から見える男性保育士の意識の諸相」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』3: 37-48.

Statistisk sentralbyrå (SSB) <https://www.ssb.no> (2022/3/15 情報取得)

高嶋景子・安村清美, 2007, 「『男性保育者』研究の動向—男性保育者に求められる資質・役割に関する研究動向とその展望」『田園調布学園大学紀要』1: 139-152.

上田星, 2020, 「男性保育者の子どもへのわいせつ行為の対策について—デンマークからの示唆」『国際幼児教育研究』27: 159-171.

山中拓真, 2019, 「男性保育者の増加を促す方策についての一考察—ノルウェーのアクション・プランに着目して」『国際幼児教育研究』26: 125-134.

矢野円郁, 2020, 「男性保育士に対する態度とジェンダー・ステレオタイプとの関係—保育士の専門性認識を高めるために」『哲学』144: 219-238.

Xu, Y. & M. Waniganayake, 2018, *An exploratory study of gender and male teachers in early childhood education and care centres in China*. *Compare*, 48(4): 518-534.

本研究は令和2年度研究活動スタート支援 JSPS 科研費 JP20K22260、および2019年度ノルウェー科学技術大学—お茶の水女子大学共同研究 INTPART-Research project の研究助成によるものです。